

≪ 第四十四回 城戸賞 応募作品 ≫

Change my life

伊藤洋子

【あらすじ】

「明るく楽しく」をモットーに生きてきた独身カメラマンの菊丸（こきま）は、その日、高校の同級生・小泉と数年ぶりに再会。久々の早帰りですれ違ひで妻が待っているというのを聞き流し、強引に飲みを誘う。しかし通販カタログの仕事くらいしか知らない菊丸は、酒代を奢ってもらい、売れ残った自分の写真集まで売りつける始末。ところがその帰り道。店に写真集を忘れたという小泉の代わりに引き返した菊丸の背後で、事故が起こる。交差点に車が突っ込んだのだ。目の前で小泉がはねとばされ……。

数日後。小泉の葬儀にいつもと変わらぬ様子で現れた菊丸だが、残された妻と幼子を見て、気を失い倒れてしまう。その後、撮影中に事故のフラッシュバックで過呼吸を発症したり、親子連れを見ては、父親の顔が小泉に見えたりと、パニック状態に……。

そして何かに導かれるように、首を吊ろうとした瞬間、同級生の桃子が訪ねてきたのに驚き、踏み台を蹴ってしまふ。ジタバタする菊丸を、異変を感じた桃子が無事に救助するが……。

「何で助けた」と逆上する菊丸。親も妻子もいない自分が死ぬべきだったと、苦しい胸の内を吐露する。しかし桃子は、「理不尽な死はいっぱいある。神様が決めたこと。そう思うしかない」と一喝。

実は桃子は医者で、葬儀で倒れた菊丸を気にかけて、様子を見に来たのだった。桃子は気分転換にと、菊丸を旅行に誘う。

そこは鎌倉の海だった。菊丸に苦い思い出が蘇る。高校生の時、桃子が好きだった菊丸は、卒業遠足でキスすることに成功したが、直後に「なんか違う」と、フラれていたのだ。

なぜ今ここに……？ 訳の分からぬまま菊丸がさらに連れて行かれた場所は、桃子の勤める病院、しかもホスピス病棟だった。しばらくここに寝泊まりし、希望する患者の最期の時を、写真に収めてほしいという。「死んでいく人を撮るのか？」と、面食らう菊丸。だが、桃子は「菊丸は断れないわよ」と強気で言う。

菊丸は忘れていたのだが、どうやら高校生の時にも、

桃子に何か借りがあるらしい。

やむなく写真を撮り始める菊丸。しかし死に直面している人と接することで、死に囚われていた菊丸の心

も、次第に癒され変化していく。

一方、勝手に独身だと思っていた桃子には、外科医の夫がいることが判明。おまけに高校生の連れ子までいて、菊丸は密かにショックを受ける。しかし桃子の夫は、現在、ホスピス病棟の患者だった……。

【登場人物】

菊丸慎一（42）：カメラマン・独身
福田（鬼塚）桃子（42）：内科医・菊丸の同級生

内藤美智子（45）：臨床心理士
福田直人（50）：外科医・桃子の夫
福田沙織（16）：福田の娘・高校一年生

室井慎太郎（76）：ホスピス患者
室井静枝（70）：室井の妻

小泉守（42）：菊丸の同級生
小泉佐知（36）：小泉の妻
坂口正志（42）：菊丸の同級生

赤木武夫（56）：ホスピス患者
赤木和江（50）：赤木の妻
赤木勇介（18）：赤木の息子・大学生

守屋拓郎（38）：ホスピス患者
守屋由香（32）：守屋の妻
堂本勝也（48）：ホスピス患者
白川直美（38）：堂本の恋人
白川友也（4）：直美の子供

関根一成（60）：医長
若林由紀恵（45）：沙織の実母
君島（50）：カメラマン派遣事務所の社長
菊丸佳代（故人）：菊丸の母

カメラアシスタント

モデル

レポーター

看護師など

○ 撮影スタジオ（渋谷あたり・夕）

カメラを構えた菊丸慎一（㉔）が、狭いスタジオを派手に動きながら、次々とシヤッターを切っていく。

菊丸「いいねいいね、そのスカートの揺れ。表情もOK! : : : くう、たまらないねえ。シヤッター切る指も喜んじやってるよお」と、いかにもアイドルやファッション誌の撮影のようだが、被写体は喪服を着たモデルたちである。

撮影の終わったモデル、スタッフに囁く。

モデル「うるさいから、次は別の人にして」

聞こえて苦笑いするカメラアシスタント。

菊丸、尚もハイテンションで撮り続ける。

○ そのビルの前（夜）

「終わった、終わった」と、やりきった感で出てくる菊丸。

アシスタントが後から出て来て、

アシスタント「じゃ、お疲れさましたー」

菊丸「え、待ってよ。飲みに行くでしょ？」

アシスタント「いや、彼女、待たせてるんで」

さらりと言い、さっさと行ってしまふ。

菊丸「（拗ねて）俺より彼女なわけね」

と、その前をサラリーマン姿の小泉守（㉔）が通り過ぎる。

菊丸、一瞬考えて、男の前へ回り込む。

菊丸「おいおい、小泉だろ？」

小泉「! : : : 菊丸？」

菊丸「おー、久しぶりー」

言うが早いか、小泉に抱きついていっている。

小泉「（苦笑）よせよ。変わってないな、お前」

菊丸「仕事この辺だっけ？ もう終わり？」

帰んの？ なら飲もうよお、再会を祝して」

小泉「急に言われてもな。子供、風呂に入れ

る約束してるし。久々なんだよ、早いのに」

菊丸「（甘えて）えー、それは明日でもいいでしょ。俺と子供、どっちが大事なの？」

小泉「子供」
菊丸「だよ。でも、ね、ちよつとだけ」
小泉「（呆れ笑いで）すぐ解放しろよ」
菊丸「やった！俺、いい店、知ってる」
と、目の前の居酒屋チェーン店を指差す。
小泉「え、そこ？」
菊丸「ん、ここ。俺、金ないから」

○ 居酒屋・店内（夜）

菊丸、小泉のスマホ画面を凝視している。
待ち受けには可愛い赤ちゃんの写真。
菊丸「うーん、お前に似てない。可愛い……」
小泉「春奈っていうんだ。やつとできた子供
でさ。六ヶ月。首がすわって風呂入れるの
も楽になったんだよね」
菊丸「ふーん。あれ？俺、お前の結婚式、
呼ばれたっけ？」
小泉「呼んでない。海外で親族だけ」
菊丸「だよな。仲間ハズレかと思った」
小泉「『結婚しましたハガキ』は送っただろ。
で、お前は？」
菊丸「妻子がいるように見えるか？」
小泉「だな。そーいや鬼塚だけハガキ戻って
きたけど、あいつの消息、知ってる？」
菊丸「さあね、もう十年以上会ってないだろ」
小泉「あ、俺、突然記憶がよみがえった」
菊丸「ん？（と、ビールを飲む）」
小泉「お前と鬼塚、キスしてたよな。ほら、
高校の卒業遠足で行った鎌倉の海」
菊丸「！（ビール噴き出す）」
小泉「（避けて）動揺しすぎ」
菊丸「あ、あのな。あれはな……」
小泉「正直、ちよつと驚いたよ。おまえが惚
れてたのは知ってたけど、あの鬼塚が……」
菊丸「黙れ黙れ。今だから言うけど、俺にと
ってあれは、青春の深い傷なわけよ」
小泉「傷？ けっこういい雰囲気だったけど」
菊丸「そう！ いい雰囲気だった。だから俺

もいけると思つて勇氣出したんだよ。で、
したよ。やさしくな

○ 回想・鎌倉の海岸（二十四年前）

夕陽の海をバックに、菊丸（一〇）と鬼塚
桃子（一〇）が唇を軽く合わしている。

菊丸の声「そしたら、あの女、なんて言った
と思う？」

桃子、菊丸から唇を離して、

桃子「なんか違う」

菊丸「（呆然と）……え？」

○ 元の居酒屋・店内（夜）

小泉「（爆笑して）マジ？ それは傷つく」

菊丸「だろ？ 失礼な女だよ。ま、今頃はど
つかの病院でバリバリ稼いでるんだろうな、
患者カモにして。羨ましいねえ。俺なんか
借金返済でバタバタよ」

と、リュックから一冊の本を出して、
菊丸「ね、だから、これ買わない？ 俺が出
した写真集、『富岳百人景』。ズバリ富士山

の写真が百人枚。除夜の鐘と同じ！ 縁起
がいいよお。今日は二冊ご用意があります」

小泉「……売れなかつたのか？」

菊丸「ま、そういうこと。買い取りさせられ
てさ。だから今はいろんな仕事やってるわ
けよ。今日は通販カタログの撮影。喪服は
盛り上げんの、しんどいよお」

小泉「これじゃ、俺がカモだな。ま、いつか。
一冊買ってやるよ。あとこの酒代も」

菊丸「おお！ ありがたい。（手を合わせ）神
様、今日ここで、小泉さんと会わせてくれ
たくれたことに感謝します！」

小泉「（笑って）神様、俺はこいつに会ったこ
と恨みます。で、いくら？ 写真集」

菊丸「おまけで二千五百円でございます」

小泉「一定価じゃねえか」

菊丸「おまけは、俺のサインね」
小泉「お前には負けるよ（と、お金を出す）」
菊丸「ははあ、慎んで頂戴します。あ、サー
ビスで写真もお撮りしますよ。再会記念」
菊丸、カメラを出して、パシャパシャと。
小泉、「よせよ」と言いながらも楽し気に
ポーズをとっている。

○ 居酒屋前の道（交差点（夜））

菊丸と小泉が店から出て歩いてくる。
小泉「じゃ、また今度ゆつくりな」
菊丸「はいはい。俺を捨てて愛しい奥さんと
春奈ちゃんのもとへお帰り下さいませ」
と、交差点で信号待ちになる。
小泉「（ハッと気づき）あ、俺、店に写真集忘
れてきた。わるい、取って来る」
菊丸「マジ？ あ、いいって。俺行く。ちょ
っと待ってて」
菊丸、小走りに引き返す。
と、背後から「ドンッ」と凄まじい音。
振り返る菊丸。
と同時に、交差点でぶつかった車の一台
がスピンし、信号待ちに突っ込んでいる。
弾き飛ばされる、人、人、人……
菊丸には、その中の一人が小泉に見えた。
菊丸「！」
道に転がっている小泉のスマホ。
その待ち受け画面に、春奈の笑顔がある。

○ テレビ映像

レポーターが現場で事故を伝えている。
レポーター「昨夜九時頃、この交差点で直進
してきた車と右折車が衝突。スピンの車
が信号待ちの人に突っ込むという事故が起
こりました。死傷者二十名、そのうち亡く
なった方は三名で、お名前は……」

○ 聖病院・ロビー（翌朝）

その画面が、テレビに映っている。
レポーターの声『……小泉守さん、四十二歳、
会社員……』

前を通り過ぎようとして、白衣の福田（鬼塚）桃子（42）の足が止まる。

桃子「（画面を凝視して）……」

○ 葬儀会場・表（数日後・夜）

中では小泉の通夜が行われている。

受付に集まっている、坂口正志（42）ら同級生。事故の悲惨さ等を話しているが、そこに菊丸が来るのが見え、押し黙る。

菊丸「（皆に気付き）おお、懐かしい顔がた

くさん！ お前、坂口か。太ったなあ」

坂口「あ、ああ……」

普段と変わらない様子の菊丸に、顔を見合わせる坂口たち。

坂口「菊丸……お前、大丈夫か？」

菊丸「ん？ 何が？」

坂口「事故の時、小泉と一緒にいたって……」
菊丸「（それには答えず）みんなもう焼香、済ませたの？ はやく並ばないと」

菊丸、さっさと受付を済ませて中へ。
心配気に菊丸をみつめる坂口たち。

○ 同・会場内（夜）

響く読経と、すすり泣く声。

焼香に並んでいる菊丸と坂口たち。

喪主席には、春奈を抱きながら気丈にふるまう小泉の妻・佐知（36）の姿がある。

菊丸、顔を上げ遺影を見る。

その小泉の顔は笑顔だ。

菊丸「（その脳裏に）……」

× × ×

（フラッシュ）

道で会った時の小泉。

小泉「急に言われてもな。子供、風呂に入れ

菊丸、いつもの調子でレインコートのモデル達を撮影している。
菊丸「いいねいいね。そのコートの揺れ。セクシーだよお。じゃあ傘、開いちゃおうか」
一斉に傘を開きはじめるモデルたち。
と、ボンツ、ボンツ、と開く音が重なる。
菊丸「！」
その脳裏に、衝突する車や弾き飛ばされる人々が、フラッシュバックして――。
菊丸、急に手が震えて過呼吸になる。

○ カメラマン派遣事務所

デスクでため息を吐く、社長の君島(50)。
君島「その前で菊丸が頭を下げている。」
菊丸「いえ：：」
君島「でも信用失くすよ。あのさ、俺、今からすっごいヒドイこと言うぞ」
菊丸「：：？」
君島「お前の境遇には同情する。そりや目の前で友人に死なれちゃ堪らないよな。けど、お前はカメラマンだろ？ あの現場をさ、あの悲惨さも含めてさ、カメラに収めるべきじゃないかったのか？」
菊丸「：：」
君島「こんなこと言いたくないけど、お前、借金もあるだろ。もつと気持ち強く持てよ。乗り越えろ。いいかそのためには……」
菊丸、君島の声がだんだん遠くなる。

○ 近所の道

菊丸がぼんやり歩いていると、前から赤ちゃん連れの親子が来る。
――と、その父親の顔が小泉に見えた。
菊丸「！」
菊丸、逃げるように立ち去る。
すると、「おじちゃん、危ないよ」という

声と共に手を引つ張られる。
信号は赤。目の前を車が通り過ぎて行く。

菊丸「あ、ありがとね……」
振り返ると、ランドセル姿の女の子。
菊丸の顔を見て不思議そうな顔をする。
菊丸、自覚なく泣いていて――。

○ 菊丸のアパート・表（夕）

六世帯ほどの中古アパート。
一階の角部屋に「菊丸」と手書きの表札。

○ 同・菊丸の部屋（夕）（翌朝）

一DK。散らかってはいないが、棚や壁
に写真がいっぱい飾られている。
その隅にヒザを抱え蹲っている菊丸。
動かない。窓からは夕陽がさしている。
夜。電気も点けず、そのまま同じ姿勢の
菊丸。動かない。
朝。やはり同じ姿勢のままの菊丸。外が
明るくなり、鳥の声に僅かに反応する。

○ その近所の道（朝）

高級車が止まり、桃子が降りてくる。
メモを見ながら、辺りを見回す。

○ 菊丸のアパート・部屋（朝）

ドアストッパーに紐が掛かっている。
菊丸、もはやその顔に生気はない。
踏み台に乗ったまま、紐に首を通す。
その視線の先に海岸で撮った古い写真。
高校生の菊丸、小泉、坂口、そして桃子
が笑って写っている。

桃子の声「菊丸、呼び鈴が鳴り、桃子の声。」

菊丸「！」
驚いた拍子に踏み台が倒れる！

○ 同・玄関ドア前（朝）

桃子、反応がないのでドアを叩き、ノブを回してみるのが、開かない。
すると中からかすかに呻き声が……。
ドアの新聞受けから中を覗くと、宙に浮いた足がバタバタと動いている。

○ 同・裏のベランダ（部屋）（朝）

急ぎ回ってきた桃子が、ベランダに来る。
部屋の中には、首の紐を両手で握り締め、もがいている菊丸。
桃子、窓のカギが掛かっているのを確認すると、洗濯竿を外しその先端で窓のカギ部分を割り、中に手を入れ開ける。
急いではいるが、慌ててはいない。
部屋に入り、菊丸の足元に転がっている踏み台を立てると、その足が無事、着地。

菊丸「（苦し気に）ハアハアと）……」

菊丸、紐から首を抜くとへたり込む。

菊丸「な、なんで、ここに……」

桃子「お通夜の時、坂口くんに聞いたから」

菊丸「……それで？」

桃子「ねえ、お礼は？」

菊丸「……は？」

桃子「そもそもこの間のお礼がまだよね。私が倒れたあんたを診てあげたのに」

菊丸「そう……。忙しいからすぐ帰ったけど」

桃子「……（素直に頭が下げられない）」

菊丸「と、桃子が靴を履いたままなのを見て、

桃子「（平然と）あ、忘れてた」

桃子、靴を脱ぎ、玄関に置きに行く。

桃子「……（悟られぬよう手を押さえる）」

桃子「……（悟られぬよう手を押さえる）」

桃子「……（悟られぬよう手を押さえる）」

桃子「……（悟られぬよう手を押さえる）」

桃子「……（悟られぬよう手を押さえる）」

菊丸「不意に自分が情けなくなり、
菊丸「どうして助けた……」
桃子「え？（振り向く）」
菊丸「どうして……放っておいてくれなかつ
たんだ……」
桃子「反射的によ。ふつう目の前で死のうと
している人がいたら、そうなるでしょ」
菊丸「……その言い方、腹立つ」
桃子「なによ、ジタバタしてたくせに」
菊丸「（カッと）うるさい！ お前に俺の気持
ちがわかってたまるか！」
桃子「わかんないわよ。わかってほしいなら、
ちやんと口に出して言いなさいよ！」
桃子、菊丸の前に座り、じっと見据える。
菊丸「（気圧され）お、俺は……」
桃子「（促すように）ん？」
菊丸「し、死ぬなんて今までこれっぽちも
考えたことなかった。でも今は……なぜ生
きているんだって誰かが囁くんだよ。怖いん
だよ。知らぬ間に泣いてんだよ、俺……」
桃子「……」
菊丸「（すがるように）なあ、何で俺じゃなか
ったんだ？ あいつには可愛い奥さんと子
供がいる。親だっている。でも俺はいない。
独りだ。悲しむヤツなんてたかが知れてる。
ほんのちよつとの差だったんだよ。なのに、
どうして俺じゃ……」
桃子「そうね。菊丸が死ねばよかった」
菊丸「！」
桃子「そう言うってほしいの？ そう言えば楽
になる？」
菊丸「……」
桃子「いい？ 菊丸は運がよかった。あの日
も今日も。ただ、それだけ」
菊丸「（愕然と）お前は鬼か……」
桃子「そうよ。そうじゃないと、医者なんて
やってらんない。（少し感情が高ぶり）理不
尽な死なんて、いっぱいあるの。それ、い
ちいち考えてたら気が変になる。全部、神
様が決めたこと。そう思うしかないの」

菊丸「……（胸に響くが、納得したくない）」

にらみ合うようにしばしの沈黙――。

と、桃子がふと壁の写真に気づく。

さつき菊丸が見ていた高校時代の写真だ。

桃子「あ、これ卒業遠足の鎌倉の海岸よね？」

菊丸「……ああ」

桃子「懐かしー。（意味深に）ねえ、この時のこと覚えてる？」

菊丸「（ドキッと）さあ……」

桃子「そうだ。これから行ってみない？ 何

泊分かの用意してさ。海は癒されるわよ」

菊丸「は？ そ、そんなこと急に……」

桃子「あ、カメラ忘れないでね」

菊丸「カメラ？」

桃子「じゃ、私は外の車で待ってるから」

菊丸「うん……（ハッと）いや、ちよっと！」

菊丸「（ぶら下がった紐を見つめ）……」

窓の割れた部分に新聞紙が貼られている。

○ 走る車の中

運転している桃子。

助手席に菊丸が荷物を抱え座っている。

菊丸「なあ、やっぱこの展開、おかしくない？」

桃子「そう？ 運転の邪魔だから寝ててよ」

菊丸「はあ？」

桃子「どうせ何日も寝てないでしょ？」

菊丸「（凶星で）……ね、眠れないんだから仕方ないだろ」

桃子「やっぱりね。大丈夫、寝られるわよ。私、催眠もできるの。ほら、目つぶって」

菊丸「ホントか？（と、素直に目を閉じる）」

桃子「丸々太った羊が一匹、二匹、三匹……」

菊丸「そんなんで寝れるか！」

○ 鎌倉の海岸

止まっている桃子の車の中、菊丸がだら

しない顔で熟睡している。
桃子がコンビニ袋を手に来て、開いてい
る窓からクラクションを軽く鳴らす。

菊丸「！（驚いて起き）な、何！」

桃子「着いたよ。お昼、食べよ」

× × ×
海岸の石段に座って、おにぎりやパンを
食べている菊丸と桃子。海風が心地よい。

桃子「気持ちいいでしょ」

菊丸「（心底）ああ」

桃子「思い出すなあ」

菊丸「ん？」

桃子「ここでキスしたこと」

菊丸「！（喉をつまらせる）」

桃子「青春してたよね」

菊丸「（慌てて飲んで）覚えてたのか？」

桃子「そりゃ覚えてるわよ。あれが初めて
だったんだから」

菊丸「（ちよつと嬉しい）そうなの？」

桃子「だからヘンに幻想抱いてたのよね……」

菊丸「（ボソツと）で、あのセリフか……」

× × ×
（フラッシュユ）

海岸。高校生の桃子、菊丸から唇を離し、

桃子「なんか違う」

× × ×
桃子、食べ終わるとさっさと立ち、

桃子「さ、思い出話は終わり。お仕事お仕事」

菊丸「へ？」

桃子「そこ。私が勤めている病院」

桃子の指さした先、『聖病院』と看板のあ
る大きな建物がある。

菊丸「（訳わからず）あのさ、泊まるって……」

桃子「ここよ。ちよつと頼みたいことあるの」

菊丸「は？」

○ 聖病院・エントランス

桃子に連れられ入ってくる菊丸。
多くの患者が行き交っている。

菊丸「へえ、結構大きい病院だな。で、頼み
って何だよ。そういうやお前、何科の先生？」
桃子「専門は内科」
エレベーターに乗る菊丸と桃子。
菊丸「（階数表見て）じゃ、二階か」
桃子「ううん。今は別のところ」
桃子、「5」のボタンを押す。階数表の五
階、『ホスピス緩和ケア病棟』の文字。

○ 同・ホスピス病棟・ロビーと廊下

エレベーターが開き、降りる菊丸と桃子。
菊丸「へ？ 何ここ？」

一見、ホテルのロビーと見間違ふような
造り。花が多く飾られ窓も大きく明るい。
カウンターの奥にはナースステーション。

桃子「（看護師たちに）後で紹介しまーす」

と、桃子は菊丸を連れて通り過ぎる。
訳わからず、キョロキョロする菊丸。

すぐに広いデイルーム（共用部分）があ
り、テレビ、ピアノ、本棚もある。

菊丸、「あっ」と、本棚に駆け寄って、

菊丸「これ、俺の写真集『富岳百八景』じゃ
ん。見つけて買ってくれたのか」

桃子「ああそれ、最近入った患者さんがたま
たま持ってて知ったの。まさか菊丸が写真
集を出してるとはね」

菊丸「そつか。嬉しいな。ファンがいたとは」

桃子「ファンかどうか知らないけど」

そこへ医長の関根一成（60）が通る。

関根「あ、鬼塚先生、お帰り。その方が例の
カメラマン？」

桃子「はい、菊丸慎一さんです」

関根「どうも。医長の関根です。よろしく（と
握手）じゃ、悪いけど急いでるから」

関根、さっさと行ってしまふ。

菊丸「（怪訝に）例のカメラマン……？」

○ 同・面談室

桃子「毎日いてくれって言うわけじゃないの。仕事のある時は戻ってもらっていいし……（ふと）そういうえば仕事は？」

菊丸「先に聞けよッ。まあ……今は暇だけど」桃子「それも困るな。こっちはボランティアだから」

菊丸「は？」桃子「もちろん、経費と食費くらいは出すわよ。寝る場所はここの家族室を使ってね。いつも一部屋は開いてるから」

菊丸「ちよ、ちよと待て。勝手に決めるな。それに俺は……一度死のうとした人間だぞ。その俺に死んでいく人を撮らせるって……何かおかしいだろ」

桃子「そう？ でも菊丸は断れないわよ」

菊丸「なんで」桃子「忘れたの？ 今日の事もだけど、高年生の時の貸し。まだ返してもらってないんだけど」

菊丸「は？ そんなもん無いよ」

桃子「あるわよ。やつぱり忘れてるんだ。なら思い出すまで、きちんとやってよね」

菊丸「そんな一方的な……」

桃子「ぐちゃぐちゃ言わない。(凄んで)いい？途中で勝手にあの世に逝ったりしたら、あなたの骨、野ざらしにしてやるから」

菊丸「！」桃子「(にこつと)よろしくね」

菊丸「……(固まっている)」

○ 同・その前の廊下

桃子と、うな垂れた菊丸が出てくる。

沙織「そこへ制服姿の福田沙織(16)が来て、桃子「沙織ちゃん」

菊丸「……お母さん？ お前、結婚してたの？」

桃子「そうよ。私をいくつだと思ってるのよ」菊丸「でもさつき、鬼塚先生って……」

桃子「独身の時から勤めてるから、便宜上ね」

菊丸「お前、こんな大きい子も……」

沙織「私は連れ子です。沙織っていいいます」

桃子「継母です。鬼塚から福田になりました」

菊丸「（呆気）そんな露骨に……」

沙織「みんな知ってるからいいんです。実の

母は五年前に浮気して逃げちゃいました」

桃子「（制して）沙織ちゃん」

沙織「あ、これ、パパから（と、メモを渡す）」

桃子「ありがと」

二人を見て、なぜか複雑な思いの菊丸。

菊丸「あ……ダンナさん……：：：どんな人？」

桃子「え？」

桃子と沙織、一瞬、顔を見合わせる。

菊丸「あ！ そっか、医者か。そうだよな。

だからあんな高そうな車……なるほどね」

桃子「そう、外科医」

菊丸「外科医！ すごいな。ハハ……：：：俺とは

大違いだ……」

菊丸、密かにショックを受けている。

○ 同・デイルーム・テラス（夕）

デイルームの外に海に見えるテラスがあり、菊丸、ぼんやりと海を眺めている。

菊丸「（ボソッと）鬼塚が福田ね。鬼から福つて……笑っちゃうな……」

そこへ病棟患者・室井慎太郎（76）が来て、菊丸に声をかける。

室井「新しい方ですか？」

菊丸「（驚いて）いえ、患者ではなくて……」

室井「ああ、すみません。お顔の色がよくな

かったの。ご家族の方ですか？」

菊丸「それも違うんですけど……：：：一応、カメ

ラマンです」

室井「カメラマン？」

菊丸「その棚にあるんですよ、私の写真集」

美智子「そこへ白衣の内藤美智子（45）が来て、

美智子「菊丸さん、菊丸慎一さん」

室井「！」

菊丸「あの、菊丸は私ですけれど」

美智子「初めました。臨床心理士の内藤です。

先ずはちよつとおしゃべりしましょうか」

菊丸「は？」

美智子、有無を言わず菊丸を連行する。

なぜか硬い表情で菊丸を見ている室井。

○ 病院前の海岸（夕）

美智子に連れられて来ている菊丸。

美智子、夕陽に向かって深呼吸しながら、

美智子「夕陽は、目と心に沁みますね……」

菊丸「はあ……」

美智子「『神は真実な方です。あなた方を耐え

られないような試練に遭わせることはなさ

らず、試練と共に、それに耐えられるよう、

逃れる道をも備えていて下さいます』」

菊丸「（聞き入って）あの……？」

美智子「あ、聖書の言葉です。鬼塚先生から

聞きました。お友達の事故のこと、今日の

こと……抑えていた気持ちを誰かにぶつけ

るのは、大切なことです」

菊丸「……」

美智子「運がいいと私も思います。でもそう

は思えない気持ちもわかります。逆に運が

悪かったと思っっているかもしれません。そ

れもまた、わかります」

菊丸「いろいろ……わかるんですね」

美智子「（微笑んで）時には、わかっているフ

リもありますけど」

菊丸「（苦笑）」

美智子「とりあえず言っておきたいことは、

これからも不意に事故のことを思い出した

り、自分が消えなくなるような瞬間が襲っ

てくるかもしれません」

菊丸「……」

美智子「その時は先ほどの聖書の言葉を思い

出して、私や鬼塚先生に相談して下さい」

菊丸「さっきの言葉……長かったですけど」

美智子「(笑って)です。でも今回のあなたの『逃れる道』は、神様より先に鬼塚先生が作って下さったと思いますよ。医長や看護師に根回ししていただきましたから」

菊丸「根回し？」

美智子「写真、撮るんですよ。今、人と向き合うのは、いいことだと思います。そういえば、鬼塚先生、あなたに高校の時の借りがあるって言ってましたよ」

菊丸「いやいや、それ逆で、俺の方に借りがあるらしくて……覚えてないんですけど。それでも思い出せて。ホント昔から高飛車で怖くて、もうムチャクチャ言うし……」

美智子「(笑う)」

菊丸「(神妙に)でも、あいつがここに連れて来たのは、俺のため……なんですよ。」「美智子「だと思えます。(ふと)でも、ご自分のためもあるのかな……」

菊丸「え？」

美智子「あ、いえ。戻りましょうか」

菊丸「……？」

○ 聖病院・ホスピス病棟・廊下(夜)

家族室の前。桃子、菊丸が眠っているのを確認し、ドアを閉める。そこへ美智子。

美智子「どう？ ちゃんと眠ってる？」

桃子「はい。鍵かけてないんで、覗いちゃい

ました。今日はありがとうございます」

美智子「いろいろ大変ね、鬼塚先生も」

桃子「いえ、大変なのはみんな一緒ですから」

美智子「そういえば、彼、借りがあるのは自分

だだって言ってたけど、本当はどっち？」

桃子「(意味ありげに)さあ……」

○ 朝の海岸(翌日)

○ 聖病院・ホスピス病棟・赤木の病室前

桃子と、カメラを手に緊張気味の菊丸。

病室のドアにコスモスの絵が飾ってある。桃子「ここが依頼のあった赤木武夫さんの病室。『コスモス』って覚えてね。見舞客が患者さんの許可なく病室に入らないよう、名札は付けてないから」

菊丸「へえ、いろいろ気を遣うんだ」

桃子「それで赤木さんのことだけど……まあ、コミュニケーションは、菊丸に任せるわ。一応プロだもんね」

菊丸「いちいち引つかかるモノ言いだな」

桃子「今、奥さんと息子さんいらしてゐるから、ちようどよかつたわ。二週間ぶりなの」と、ドアをノックし、開ける。

桃子「赤木さん、お約束したカメラマン、連れてきましたよ。なんでも注文して構いませんから。(菊丸に) じゃ、あとよろしく」

ベッド上に、顔色の冴えない赤木武夫(56)が微笑んでいる。

菊丸「(身を引き締め) 菊丸です。よろしくお願いたします」

○ 同・赤木の病室

準備をしている菊丸。が、にこやかな赤木とは対照的に、妻の和江(50)と息子菊丸「どういう写真を撮りましょうか」

赤木「では先ず三人の写真と、あとは普通にしているところを適当にお願いします」

菊丸「了解です。じゃあ奥さんと息子さん、ご主人を囲むよう立ってもらえますか？」

和江と勇介、無言で面倒くさそうに立つ。

菊丸「何か感じるが明るくあれ？ 緊張してます？ にこやかにいきましよう」

菊丸、何度か声をかけシャッターを切る。しかし微笑んでいるのは赤木だけで――。

× × ×

次に普段の様子を撮ろうとするが、菊丸は、なかなかシャッターが切れない。ソファで黙々とゲームをする勇介。

和江は果物を赤木に食べさせているが、機械的で口元の汚れも気にしていない。会話もなく、赤木だけがニコニコと――。

○ 同・ロビー

菊丸「あの、ちよつとすみません」

和江「（怪訝に）なにかしら」

菊丸「今度はいつ来られますか？ 失礼ですが、あれではご主人の望む写真は……」

和江「いつ来ても同じよ。何もご存じないのね。今さら写真なんて、迷惑なだけよ」

菊丸「（顔色を変え）それはどういう……」

桃子「そこへ通りかかった桃子、菊丸を制して、たいらして下さい（と、頭を下げる）」

菊丸「！」

和江「ええ、いつになるかわかりませんが、和江と勇介、菊丸を一瞥し去って行く。」

菊丸「おい鬼塚、どういうことだよ」

桃子「ごめん。変に先入観がない方がいいと思つて……話は面談室で」

赤木「先生、あとは自分で話します」

○ 同・赤木の病室

赤木「ソファに菊丸を座らせ話し始める赤木。ソファに菊丸を座らせ話し始める赤木。」

赤木「実は私、病気になる前は、ずっと家内や息子に暴力をふるって……」

菊丸「え……（絶句）」

赤木「今は見る影もありませんけどね。体、半分くらいになっちゃいましたから」

赤木「……」

赤木「……」

ました。今さら後悔したって、私がつけた傷は、消せないんです」

菊丸「赤木さん……」

赤木「それでも有難いことに、月に二度くらいは来てくれます。義理でも何でもいいんです。ただ……ふと思っただんですよ。私には家族の写真が無いなあって。あっても、誰も笑ってないんですよ」

菊丸「笑って……ない？」

赤木「そりやそうですよ。私自身もう何年も二人の笑った顔、見てないんですから」

菊丸「それで写真を？」

赤木「ええ。プロの方に撮ってもらったら、お愛想でも少しは笑ってくれるんじゃないかって思っています。別に私に対してじゃなく、いいんです。(期待の色で)あ、さつき撮った写真、見ることでできますか？」

菊丸「(気まずく)ええ……」

菊丸、パソコン画面で写真を見せる。

が、和江と勇介が笑っている写真はない。

赤木「(さすがに)がっかりした様子で」……」

菊丸「すみません、私の力不足で。でも今度、はきつと……」

赤木「いえ、もういいんです。気にしないで下さい。三人の写真だけで満足ですから」

菊丸「でもそれでは……」

赤木「わかってたことです。わかってたのに、ちよつと欲ばっちゃいましたね……」

赤木、そう言っつて菊丸に微笑んで見せる。

菊丸「(その笑顔が)つらく……」

○ 病院前の海岸(夕)

ひとり海を見ている菊丸。

と、沙織がいつの間にか近くに来ている。

菊丸「(気配に振り返り)あ、びっくりした！」

沙織、笑って隣に座り、

沙織「いつ気づくかと思っただけ。なんか元気な

菊丸「どうも。名前覚えてくれて」

沙織「そりゃあ、お母さんのお友達だもん。あ、元カレだったりして」

菊丸「（焦り）いやいや、まさか」

沙織「冗談。お父さんと全然タイプ違うもん」

菊丸「ハハ（軽く傷つく）」

沙織「で、何かあったんですか？」

菊丸「そうだねえ……なんか、いろんな家族があるなああって思ってた……」

沙織「ふと真顔になり）いろんな家族か……」

菊丸「残念ながらね。奥さんとかいないの？」

沙織「親も……死んじゃったの？」

菊丸「母親は去年。父親は……実は知らないんだ。どこの誰かも。母親の口が堅くてね。」

沙織「ふうん……それ、ひよっとして不倫？」

菊丸「ハハ……直球だねえ。子供とこんな話していいのかな？」

沙織「大丈夫。お母さんには内緒にしとく」

菊丸「沙織の笑顔に少し心が和んで。」

○ 聖病院・ホスピス病棟・室井の病室（夕）

ベッドで休んでいる室井。

その枕元の本棚に、菊丸の写真集がある。付き添っている、妻の室井静枝（70）。

○ 同・ダイルム廊下（夜）

菊丸と桃子が話している。

桃子「そっか。赤木さん、笑ってる写真が欲しかったんだ」

菊丸「けど、驚いたよ。あの赤木さんが暴力なんて……病気が直るんだな。特

にここは、死に直面してるし」

桃子「そうね。でもホスピスって死を覚悟し

た人が入るイメージだけど、本当は全然違

うのよ。最初からそんな人なんていない」

菊丸「みんな穏やかに見えるけど、泣いたり怒ったり、

桃子「たいいていの人は、泣いたり怒ったり、

少なからずパニックになつて、一度は死を
 否定するの。その積み重ねで、だんだんとね
 ：：でも完全に受け入れられない。出来な
 いと思う。だから昼間は平気でも、夜にな
 ると不安定になる人もいるの。家族が一緒
 に寝てくれると、安心する人も多いけど」
 菊丸「なるほどね：：」
 桃子「菊丸は今晩眠れそう？ 薬出す？」
 菊丸「いや、大丈夫だと思ふ」
 桃子「そっか。それにこしたことはない。じ
 やあ私、夜勤だから」
 菊丸「ああ、おやすみ」
 菊丸「と、自分の部屋へと廊下を歩く。
 と、赤木の病室からドスン！という音。
 菊丸「！」
 菊丸「かすかに呻き声も聞こえる。」

○ 同・赤木の病室（夜）

菊丸がドアを開けると、赤木がベッド横
 にぶら下がっている。ベッドの頭柵に紐
 をかけ首を通し、体をひねり落ちたのだ。
 菊丸「（抱き上げて助け）赤木さん！」
 桃子「そこへ急ぎ桃子も来て応急措置をする。」
 赤木「：：（かすかに声）」
 桃子「（心音と呼吸を確認し）うん、大丈夫」
 菊丸「よかった：：」
 菊丸「と、床にへたり込む。」
 赤木「赤木さん：：ダメだよ、こんな：：」
 赤木「（苦し気に）どうして助けた：：どうし
 て放っておいてくれなかったんだ：：」
 菊丸「！」
 （フラッシュ）
 菊丸「助けてくれた桃子に同じ言葉を言う菊丸。
 いてくれなかったんだ：：」
 赤木「どうせもうすぐ死ぬ：：自分で死んで

何が悪い。みんな死ぬのを待ってる……」
菊丸、昼間の穏やかさとは別人の赤木に
胸が締め付けられる思い。
菊丸「ふつう目の前に死のうとして、いる人が
いたら助けるでしょ。反射的にね」
桃子「……」
菊丸「でも……それだけじゃない。気持ちだ
よ。まだ生きていてほしいから。赤木さん
が死んじゃったら俺、悲しいから……」
と、自分でもわからない感情があふれて
きて、泣いてしまう菊丸。
赤木「(胸に迫り)……」
桃子「(そんな菊丸を見て)……」

○ 病院前の海岸 (翌朝)

○ 聖病院・ホスピス病棟・赤木の病室 (朝)

そのまま赤木の病室で寝てしまった菊丸、
ソファで目を覚ます。
ベッドには穏やかに眠っている赤木。
菊丸「(安堵)……」
と、サイドテーブルの赤木宛の郵便物に
目が留まる。そこには自宅の住所。
菊丸「(何か思いついて)……」

○ 同・その前の廊下 (朝)

桃子の前に菊丸が飛び出してくる。
桃子「ちよつと、危ないでしょ」
菊丸「わるい。あ、今日は外出するから」
桃子「え？」

○ 同・赤木の病室 (時間経過)

ベッドの赤木を診察している桃子。
桃子「痛みとかありますか？」
赤木「いえ……なんか昨日より気分いいです」
桃子「それはよかった」

赤木「あの……笑わないで聞いて下さいね」
桃子「はい？」
赤木「彼……昨日泣いてくれましたよね、私の為に。私にもまだそういう人がいたんですね……会ったばかりなのに、変な人だ」
桃子「そうですね」
赤木「先生……私、本当はもつともつと生きてたいです。やつとまともな人間になれたのに……このままじゃ虚しい。時間をかけて家族にも許してもらいたい、やり直したい……それが今の本音です」
桃子「はい。私もできるだけお手伝いします」
赤木「ねえ、先生。この人は、ほとんど最期は安らかな顔で逝くんでしょう？　ありがとうって顔して……」
桃子「そういう方が多いかもしれません」
赤木「だったら私は『もっと生きたい』って、無念の顔をして逝きますよ。未練たらたら残して……したら、彼も私を助けた甲斐があるでしょう？　いいですよ、先生」
桃子「はい。ご遠慮なく」
赤木「よかった。ところで今日、彼は？」
桃子「それが、飛び出して行ったきりで……」

○ 海岸沿いの道（夕）

菊丸、カメラと封筒を持って走っている。

○ 聖病院・ホスピス病棟・ロビー（夕）

桃子「急ぎ帰ってきた菊丸を、桃子が見つける。」
桃子「ちよっと、今まで何やってたのよ」
菊丸「ストーカー」
桃子「は？」

○ 同・赤木の病室（夕）

赤木「これが赤木に封筒を渡す。傍らに桃子。」
菊丸「今の俺に出来る、精一杯のものです」

赤木「！」
赤木、封筒を開けて中を見る。

出てきたのは、妻と息子の写真。
和江は、花の水遣り、買物、立ち話などの日常のショット。

勇介は、大学やアルバイト先でのものだ。そのどれもが、笑顔の写真になっている。

菊丸「でも……見てわかる通り、どれも隠し撮りです。赤木さんに向けられた笑顔じゃないのが……すみません」

菊丸、赤木の反応が気にかかる。

赤木「苦労だったでしょう……ありがとう」
赤木の目に涙があふれている。が、写真

に涙が落ちないよう袖で拭いて――。

菊丸「（泣き笑いで）よかった……」

桃子「（小声で菊丸に）やるじゃん」

○ 同・廊下（夕）

病室を出て、歩いてくる菊丸と桃子。

菊丸「俺のこと、ちよつとは見直しただろ？」

桃子「はいはい、ちよとね」

菊丸「借りは減ったか？」

桃子「さあ……」

と、廊下の一番奥の病室のドアが開いて、
車椅子の男性が出てくる。

桃子「（小さく）あ」

菊丸、何気なしに見ていると、その車椅子
子を押しているのは沙織だ。

菊丸「沙織ちゃん？」

沙織「あ、菊丸さん。お母さんも」

菊丸、「？」と、ゆっくり視線を移す。

車椅子の男性・福田直人（50）が、気付
いて少し頭を下げる。

顔色は良くないが、優しそうな顔つき。

菊丸も少し頭を下げ、桃子を見る。

桃子「主人よ。今はこの患者さん」

菊丸「！（驚いて言葉もなく）……」

○ 病院前の海岸（翌日）

菊丸と美智子が話している。

菊丸「俺、全然知らなかった……」

美智子「福田先生、優秀な外科医で何人も命を救ってきたのに……理不尽ですよね」

菊丸「（その脳裏に）……」

（フラッシュ）

桃子「理不尽な死なんて、いっぱいあるの。それ、いちいち考えてたら気が変になる。全部、神様が決めたこと。そう思うしかないの」

菊丸「あいつ、高校の時に病気で父親亡くしてるんですよ。なのに今度はダンナさん……俺、もうなんて言っただんね……」

桃子「そこへ背後から桃子。」

桃子「何も言わなくていいわよ」

菊丸「（驚き）鬼塚！」

桃子「写真、何事もなかったように、守屋さんご夫婦。病室じゃなくてここで撮ってほしいって。よろしく頼むわね」

少し離れたところ、患者の守屋拓郎（38）と妻の由香（32）が軽く会釈する。

菊丸「（会釈を返し）若くないか……？」

桃子「三十八歳。でも明るいご夫婦よ」

菊丸「……」

守屋と由香が海をバックにポーズをとっている。守屋はパジャマではなく私服。

守屋「とにかくカッコ良く撮って下さいね。」

菊丸「え……？」

見ると、由香のお腹が少し膨らんでいる。

由香「五ヶ月なんです」

守屋「俺、会えるか微妙なんで頼みますよ。」

これから痩せてくると思うし、今がちょうどいい感じなんですから」

菊丸「(何と言っているかわからず)……」
守屋「やだな、固まんないで下さいよ。あ、こんなポーズどうです？」

と、砂浜に膝をついて由香のお腹を手で支え、そこに自分の額をあてる守屋。

守屋「俺が、父親がこんなに愛してたっていうのを、子供に伝えたいんですよ。(由香に)写真、毎日見せろよ。俺の顔忘れないように……」

由香「(涙を堪え明るく)うん、もちろん」

菊丸「(も明るく)よしッ、わかりました。こ
うなりや日本一カッコイイお父さんを撮り
ましょう。将来、自慢しまくりですよお」
菊丸、潤んだ眼を隠しながらフアインダ
ーを覗き、次々シャッターを切っていく。
菊丸「(咳く)子供に残す写真か……」

○ 聖病院・ホスピス病棟・ロビー

桃子に話している菊丸。

桃子「え、これから？」

菊丸「ああ。俺、忘れてたことがあって」

桃子「……大丈夫？ 私も行こうか？」

菊丸「……いいよ、子供じゃあるまいし。あ、春
奈ちゃんにお土産買っていかなくやなく」
菊丸、わざと明るくふるまう。

○ 小泉のマンション・外観(夕)

○ 同・小泉家・居間(夕)

小泉の遺影と骨壺が置かれた祭壇の前、
菊丸が妻の佐知に向かい頭を下げている。

菊丸「本当に申し訳ありませんでした。あの
日、俺が小泉を飲み誘わなければ……」

佐知「もういいです。何度もこうやって謝ら
れると、あなたまで恨みたくなる……」

菊丸「……恨んでいいです。でもこれだけは
届けたいと思つて……」

佐知が開けると、小泉の写真が出てくる。
菊丸「あの日、居酒屋で撮った写真です」

× × ×
(フラッシュ)

居酒屋で小泉の写真を撮る菊丸。
小泉、「よせよ」と言いながらも菊丸のカメラに向かってポーズをとっている。

× × ×
佐知「最後の写真……」

佐知「一枚一枚見ていく。カッコつけたり、ふざけたポーズで笑っている小泉。

佐知「(ポツリと) 楽しそう……」

佐知「見て、春奈を抱き、その写真を見せて、のね。久しぶりにお友達に会えて……」

菊丸「! ……」
その佐知の言葉に、堪らず頭を下げる。

○ 聖病院・外観(夜)

○ 同・ホスピス病棟・ロビー(夜)

菊丸が戻ると、白衣ではない桃子がいる。

桃子「お帰り」

菊丸「あれ? もしかして待っていてくれた?」
桃子「別に。春奈ちゃん、お土産喜んでくれた?」

菊丸「……まあな。じゃ、おやすみ」

と、行きかけて菊丸、背を向けたまま、
菊丸「あのさ、俺……死ぬなんて、小泉に許されたくないよな。だから……ありがとな。助けてくれて」

桃子「(意外で) 何を今さら……」

菊丸「(振り向き) 真面目に言っただから、真面目に聞けよ」

桃子「……ごめん」

菊丸「俺さ、明日からの一日一日は、小泉が生きたかった一日一日……そう思って生きることにした」

桃子「うん……三日坊主にならないようにね」

菊丸「だから真面目に聞けって！」

○ 同・福田の病室（夜）

桃子がそっと入ってきて、夫が寝ているベッド脇のソファに座る。

簡易ベッドには、沙織が寝ている。

桃子「（ホッと息をついて笑む）……」

福田「ん、どうした？ 何か嬉しそうだな」

桃子「あ、ごめん。起こした？ 何か飲む？」

福田「いや、（と、ベッドの背を上げ）あのさ、

沙織からも聞いて考えたんだけど、僕ら三人も、君の友達に写真撮ってもらおうか」

桃子「え？」

福田「写真、少ないよね。結婚式もしなかったし、写真だけでも撮っておけばよかった」

桃子「それは私がドレス着たくないって言ったから。ごめんね。だってどう考えても、

似合いそうにないんだもん」

福田「そうだな……君はタキシードの方が似合うかもしれない」

桃子「あ、ひどい。もう！」

二人、笑い合う中に切なさがある。

沙織「（起きていて）……」

○ 病院前の海岸（朝）

○ 聖病院・ホスピス病棟・家族室

菊丸が熟睡している。と、廊下から声。

桃子の声「（ノックと共に）菊丸、起きてる？」

菊丸、ガバツと起きて時計を見る。十時。焦ってドアを開けて、

菊丸「わるい、寝坊した！」

桃子「別にいいわよ。よく眠れたってことでしょ。それよりあとで『桜』の部屋に行つてくれる？ 写真のご依頼」

菊丸「『桜』ね。わかった」

桃子「じゃ、よろしく（と、行きかけて戻り）堂本さん、根はいい人だから」

菊丸「え？」

○ 同・堂本の病室

部屋に入った菊丸が固まっている。目に飛び込んだのは、堂本勝也(48)の背中にある『桜』の色鮮やかな彫り物。老母が体を拭き終わったところだ。

堂本「(ベッドでパジャマを着ながら)おう、あんたが噂のカメラマンか。待ってたよ」

菊丸「え……居ていただいていいですよ」

堂本「しかし老母は、菊丸に会釈し出て行く。そんな怖がるなよ。俺、現役じゃないから」

菊丸「はあ、元……(少し安堵し)それで、どのような写真をお撮りしましたか？」

堂本「女の写真だ。実は五年前、ムシヨに入る時に別れた女がいてよ。そいつを捜して、写真を撮ってきてくれ。もう二度と会えないだろうからな……」

菊丸「あ、あの……ちよつと待って下さい。私はカメラマンで、探偵では……」

堂本「赤木のおっさんに家族の写真、撮ってきてやったんだろ？ 聞いているぜ」

菊丸「えつと……それとこれとは、ちよつと違うっていうか……」

堂本「(顔を近づけ)断るか？ 俺の依頼」

菊丸「(その迫力に)……いえ、やります。やらせていただきます」

堂本「(にこつと)頼んだぞ」

菊丸「(顔を引きつらせ)……はい」

○ 住宅街

メモとスマホを手にトボトボ歩く菊丸。かな「あーもう、どうして引き受けちゃったかな、俺……」

(インサート) × × ×
 病室で堂本からメモを受け取る菊丸。
 堂本「白川直美。俺が知ってるのは、五年前
 の住所だ。悪いがあとは捜してくれ」
 菊丸「見つかなかつたら、どうなるんだよ」
 × × ×
 と、メモの住所に来る菊丸。そのアパー
 トの一室の表札に『白川』とある。
 菊丸「あ！」
 そこへドアが開き、白川直美(38)と男
 菊丸「の子(友也・ト)が出てくる。」

○ 近くの公園

公園で友也を遊ばせている直美を少し離
 れて見ている菊丸。
 菊丸「隠し撮りしようとかメラを構えるが、
 と、直美へ近づいていく。」
 菊丸「あの、すみません。(名刺を出し)私、
 こう見えてカメラマンなんです、こちら
 の公園、実にすばらしいですね」
 直美「はあ：：普通の公園ですけど」
 菊丸「それがいいんですよ。私、いろんな町
 の公園を撮っていても構いませんかねえ？」
 直美「：：ええ、まあ」
 友也「そこへ友也が走ってきて菊丸に、
 友也「ねえねえ、お父さん？」
 菊丸「え？」
 直美「ちがうわよ、友也」
 友也「なんだあ：：」
 直美「友也、がっかりしてまた遊びに行く。
 父親がすみません。あの子、生まれた時から
 と思っっているらしくて、いつか会いに来てくれる
 菊丸「(ふと)あの、息子さん、お幾つですか？」
 直美「四才です」

菊丸「四才……」
菊丸、友也を目で追い、考えて――。

○ 聖病院・ホスピス病棟・面談室（翌日）

菊丸が桃子と美智子に話している。

桃子「で、その子が堂本さんの子供？」

菊丸「だと思おう。五年前に別れたなら、計算合うだろ？ 苗字も変わってないし」

美智子「別れてから妊娠に気づいたのかもね」

菊丸「俺、堂本さんに隠す自信ない」

桃子「ダメよ。確証はないんだから」

美智子「もしそうだとしても、デリケートな

問題ね。伝えるなら彼女の許可がいるし、

そうなると、堂本さんの今の状況も……」

菊丸「死んでも言うなって脅されました」

美智子「でしようね」

菊丸「けど、もし俺が堂本さんなら、子供に

会いたいよ。会いたいでしょ、普通」

桃子「普通はそうかもしれない。でも堂本さ

んがどう考えるかは、わからない」

菊丸「じゃあ子供の気持ちはどうなんだ？

あの子、友也くんは父親が会いに来てくれ

るのを待ってるんだぞ」

桃子「それは……」

美智子「会ってもまたすぐ会えなくなる……」

菊丸「……」

桃子「少し時間ちょうだい。考えるから」

菊丸「……わかった。とりあえず彼女の写真

だけ渡すよ」

菊丸、ひとり部屋を出て行く。

美智子「菊丸さんの言うこともわかるけどね」

桃子「（ハッと）あ、そっか。忘れてた」

美智子「ん？」

○ 同・廊下

歩いていく菊丸。その脳裏に――、

× × ×

（インサート）

家の前で、ひとり遊んでいる幼い菊丸。角を大人の男性が曲がって来る度に期待し、通り過ぎるとがっかりして――。桃子の声「菊丸は父親を知らないんです……」

菊丸「……」

○ 同・堂本の病室

菊丸「封筒から直美ひとりが写った写真を出し、堂本に見せている。」

堂本「変わらずイイ女だ……ありがとよ」

菊丸「（無意識に目をそらし）いえ……」

堂本「あんた、嘘つくのヘタだな」

菊丸「え？」

堂本「直美のことで隠してることあるだろ」

菊丸「……いえいえ、何もないですよ」

堂本「いいんだよ。気なんか遣わなくて。この顔見りやわかるよ。幸せそうに……あいつ、いい男と結婚したか？」

菊丸「は？」

堂本「いいからホントのこと言えよ。五年も経つてんだぞ。結婚して、子供の一人や二人、驚きやしねえから」

菊丸「……」

菊丸「意を決して封筒から友也の写真を出す。直美と一緒に遊ぶ笑顔の一枚だ。」

堂本「やっぱ隠してたな。（見て嬉しそうに）男の子か。そういや、あいつ産むなら男がいって言ったな」

菊丸「名前は……白川友也くん。四才です」

堂本「四才……白川？」

菊丸「ふと真顔になって写真を凝視する。」

堂本「あの……」

菊丸「出てってくれ」

堂本「え？」

菊丸「もう用は済んだ」

堂本「あ、あの……会いたくないですか？

菊丸「あ、あの……会いたくないですか？ 友也くんは父親が会いに来るのを……」

堂本「いきなり菊丸の胸ぐらを掴み、

堂本「いきなり菊丸の胸ぐらを掴み、

堂本「いきなり菊丸の胸ぐらを掴み、

堂本「いきなり菊丸の胸ぐらを掴み、

堂本「いきなり菊丸の胸ぐらを掴み、

堂本「いきなり菊丸の胸ぐらを掴み、

堂本「いきなり菊丸の胸ぐらを掴み、

堂本「いきなり菊丸の胸ぐらを掴み、

堂本「いきなり菊丸の胸ぐらを掴み、

桃子「(苦笑) さあ……」

○ 同・食堂(夕)

食事をしながら話す菊丸と桃子。

桃子「そっか。まあ、結果オーライだけど」

菊丸「悪かったよ。勇み足は認める」

桃子「……沙織ちゃんから聞いたんだけど、

お母さん、去年亡くなったんだって？」

菊丸「ああ。俺、天涯孤独。カッコいいだろ」

桃子「じゃあ、お父さんのことは、わからず

じまい？」

菊丸「それがさ、聞いてくれよ。あの母親、

口を割らないどころか、遺品にさえ手がか

り残さなかったんだぜ。もうアツパレ！」

桃子「そうなんだ……」

菊丸「もうとっくに死んでるのかね、やっぱ。

それか、想像以上のろくでなしか……俺さ、

うっすらだけど父親に抱かれた記憶はある

んだよ。てことは、母親共々、捨てられた

ってことだろ。そこが堂本さんとは違う。

積年の憎しみ、ぶつけてやりたかったね」

桃子「憎しみとか菊丸には似合わないよ。だ

からお母さん、隠し通したんじゃない？」

菊丸「まあもういいよ、どうでも。考えると

腹立つしな。それより……大丈夫か？」

桃子「ん、何が？」

菊丸「いや……ま、がんばれよ」

桃子「一番つらいのは、沙織ちゃん……」

菊丸「……」

○ 同・福田の病室(夕)

ベッドで眠っている福田を見つめる沙織。

布団から出ている手をそつと握る。

沙織「……」

○ 同・ダイルーム(日替わり)

ピアノの演奏会が行われ、聴いている患

者やその家族たち。
菊丸、その様子をカメラに撮っている。

演奏が終わり帰りがけのところ。
菊丸、ふと室井と目が合い、話しかける。

菊丸「あの、私が初めてここに来た日、お目にかかりましたよね？」

室井「……ええ、その節は失礼しました。新しい患者さんと間違ってしまった。」

菊丸「いえいえ。」

室井「あ、写真を堂本さんに見せてもらいました。お子さんの。喜んでいましたよ。」

菊丸「ホントですか？（嬉しそうに）やだなあ、見せびらかしちゃって。」

室井「（ポツリと）不思議ですね……。」

菊丸「え？」

室井「神様は死を受け入れた者に、最後のご褒美を下さるのかもしれませんが……。」

菊丸「（何と言っているかわからず）……。」

沙織「そこへ沙織が菊丸を捜して来る。」

菊丸「菊丸さん、ちよつといいですか？」

○ 同・礼拝堂・外観

病院の敷地内にある礼拝堂。

○ 同・中

沙織に連れられ、菊丸が入って来る。

ステンドグラスからの光が溢れる空間。

菊丸「へえ、病院にこんなところあったんだ。」

沙織「ステキでしょ。結婚式も出来るんですよ。（前方へ急ぎ）お待たせ、パパ。」

菊丸「え？」

見ると、祭壇の前に車椅子の福田がいる。

沙織「私たちの家族写真、お願いします。」

福田「すみません、急に沙織が言い出して。」

菊丸「いえいえ、それはいいですけど……。」
そこへ美智子が桃子を連れて入って来る。

美智子「沙織ちゃん、連れて来たよー」
 沙織「ありがとう、美智子先生」
 桃子「何よ、どうしたの？」
 沙織「隠してあった花の髪飾りとブーケを桃子に渡し、」
 沙織「これくらいならいいでしょ。ドレスの代わりに白衣でいいから。写真、撮ろうよ」
 桃子「え……」
 福田「（微笑んで）僕もパジャマだし」
 美智子「鬼塚先生、恥ずかしがらないで」
 菊丸「ほ、ほら、早くしろよ。後ろのキリストさんもマリアさんも待ってるぞ」
 桃子「はあ？」
 と言いつつ、沙織に髪飾りを着けてもらい、福田の隣に立つ桃子。
 福田「（桃子を見て）うん。いいね」
 沙織「先ずはお二人でどうぞ」
 福田「あ、せっかくだから立つよ」
 福田、車椅子から立つがよろけてしまう。慌てて腕を組むフリで支える桃子。
 福田「（苦笑しポツリと）すまない……」
 桃子「（明るく）菊丸、五割増しでよろしく！」
 菊丸「お任せあれ。誰だかわかんないくらいキレイにカッコよく撮りますよお」
 桃子と福田、笑って。
 沙織「次、私も入る」
 菊丸「（三人の笑顔が切なく）……」

× × ×

写真撮影が終わったところ。
 桃子「じゃ、先に戻るね。診察あるから」
 福田「ああ、こっちは沙織がいるから大丈夫」
 桃子「沙織ちゃん、菊丸、ありがと」
 桃子、美智子と一緒に先に行く。
 沙織「パパ、大丈夫？ 疲れちゃった？」
 福田「平気だよ。沙織、悪いけど飲み物買ってきて。いつものやつ。菊丸さんの分もね」
 菊丸「いえ、私は……」

沙織「わかつた。ちよつと待ってて」

福田「ゆつくり行く。菊丸、少し気まづく、

菊丸「あ、あの、そういえば、ちんとご挨拶、

してないですよ。菊丸です。鬼塚：：桃

子さんと高校の：：「聞いています。菊丸

さん、同級生ですよ。聞いています。菊丸

「さん、同級生ですよ。聞いています。菊丸

「さん、同級生ですよ。聞いています。菊丸

「さん、同級生ですよ。聞いています。菊丸

「さん、同級生ですよ。聞いています。菊丸

「さん、同級生ですよ。聞いています。菊丸

「さん、同級生ですよ。聞いています。菊丸

「さん、同級生ですよ。聞いています。菊丸

「さん、同級生ですよ。聞いています。菊丸

「さん、同級生ですよ。聞いています。菊丸

「さん、同級生ですよ。聞いています。菊丸

「さん、同級生ですよ。聞いています。菊丸

「さん、同級生ですよ。聞いています。菊丸

○ 同・礼拝堂・中庭

菊丸「彼女：：桃子はどんな高校生だった

「彼女：：桃子はどんな高校生だった

「彼女：：桃子はどんな高校生だった

「彼女：：桃子はどんな高校生だった

「彼女：：桃子はどんな高校生だった

「彼女：：桃子はどんな高校生だった

「彼女：：桃子はどんな高校生だった

「彼女：：桃子はどんな高校生だった

「彼女：：桃子はどんな高校生だった

「彼女：：桃子はどんな高校生だった

「彼女：：桃子はどんな高校生だった

「彼女：：桃子はどんな高校生だった

菊丸「？」
 福田「実は、沙織の母親が……元妻が、私の
 病状を知って、その時は引き取りたいと言
 つてきてるんです」
 菊丸「えっ、浮気した奥さんが？（ハツと）
 福田「いいんですよ。相手は、沙織の塾の先
 生です。子供が出来て、年齢的に産める最
 後のチャンスだからと、出て行きました」
 菊丸「子供が……」
 福田「その時に、沙織も連れて行こうとした
 んですが、私に気を遣ったのか、沙織は嫌
 だと言つて残つてくれたんです」
 菊丸「そうだったんですね。沙織ちゃん、エ
 ライ。正直じゃなかった。そう思います。あの、
 余計なお世話ですけど、鬼塚は沙織ちゃん
 と生きてくつもりだと思えますよ。あいつ
 なら、絶対……」
 福田「ですよ。だから迷うんです。彼女は
 これからまだ別の人生を歩める。でも沙織
 が一緒にいたら、選べないこともあると思
 うんです。沙織もそれで気を遣うかもしれ
 ない……」
 菊丸「それは……」
 福田「沙織にとつても、どちらが幸せなのか
 わからないうち、まだ言えなくて。私も、沙織
 を頼むとは、まだ言葉は重くない……私……死
 んでいく者が残す言葉は重くない……」
 菊丸「だっか、何も言わなくていいんじゃない
 ですかね？」
 福田「え？」
 菊丸「私だったら、自分のいない世界に責任
 持てないんで、本人に任せちゃいます。無
 責任と言われようが、まあそこは信頼して
 るつてことで勘弁してもらつて」
 福田「（思わぬ答えに）……」
 菊丸「なーんて、家族のいない私が、勝手な
 こと言つてるんですよ」
 福田「（フツと心が軽くなり）そういう考え方
 もあるんですね……」

その時、近くの物陰で止まっていた足が動き出す。ジュースを持った沙織だ。沙織「（明るく）お待たせ。もう勝手に移動するから捜しちゃったよ」

福田「ごめんごめん」

菊丸「（ジュース見て）え、いつものって、いちご牛乳？ 可愛いですねえ、お父さん」
三人、何事もなかったように笑顔で。

○ 同・ホスピス病棟・家族室（夜）

菊丸、ノートパソコンで桃子たち親子の写真をチェックしながら呟いている。

菊丸「お、これいいんじゃない」

菊丸「ベストショットの三人の笑顔の写真。」

菊丸「さずが俺、いい腕してますねえ」

と、桃子と福田のツーショット写真を見ているうちに、少し複雑な思いになる。
菊丸「……」

○ 病院前の海岸（夜）

菊丸が缶ビールを飲みながら、夜の海を眺めている。

菊丸「（その脳裏に）……」

○ 回想・××高校

入学式。高校生の菊丸に坂口が囁く。

坂口「あいつカッコよくね？ 女子だけど」

視線の先、凜とした姿で立つ桃子がいる。

菊丸「マジか」

教室。菊丸の前の席に桃子が来る。

桃子「鬼塚です。よろしく（座る）」

菊丸「でかつ！ 前、見えねえ」

桃子「はあ？」

× × ×
体育館。華麗にバスケのシュートを決める桃子に、女子が歓声をあげている。

二階から桃子を写真に撮っている菊丸。

その桃子の写真を、菊丸がファンの女子
にこっそり売っている。

菊丸「これ見て。シュートの瞬間！まさに

奇跡の一枚だよ。一枚百円、お買い得！」

と、いつの間にか背後で仁王立ちの桃子。

桃子「私で商売してんじやないわよ！」

菊丸「（ひいっ）！」

放課後の教室。ひとり勉強している桃子

に、からかい半分で話しかける菊丸。

菊丸「バスケット止めたんだってな。お前、マジ

で医学部受けるの？ 医者になんてなった

ら忙しくて結婚もできねえぞ。ただでさえ

可愛くない……」

桃子「うるさい。父親の病気を治したいの」

菊丸「……」

× × ×

授業中の教室。突然、前のドアが開いて、

先生「鬼塚、至急、病院に行きなさい」

桃子「！」

菊丸「……」

○ 回想・葬儀場

桃子の父親の通夜に参列する菊丸。

必死に涙を堪える桃子を見て――

菊丸「……」

○ 回想・××高校

教室。暗い顔で登校してくる桃子。

着席すると、机の中に何かを見つける。

それは菊丸が自撮りした変顔の写真。

他に同級生や先生の変顔写真もある。

桃子「（思わず笑って）……」

その桃子の様子を隠れて見ている菊丸。

菊丸「（ホッと）……」

○ 回想・鎌倉の海岸

夕陽をバックに唇を合わせる菊丸と桃子。

○ 元の海岸（夜）

菊丸「ハツとなつて、思わずビールの缶を握りつぶす。」
菊丸「サイテーだ、俺……」

○ 聖病院・ホスピス病棟・ロビー（朝）

菊丸「急で悪いんだけどさ。昨日遅くに仕事の依頼入って。どーしても俺じゃなきゃダメつていうから、仕方なく承知したのよ」
桃子「そう……ま、仕事優先っていう約束だしね。何日くらいで戻れそう？」
菊丸「えつと……：：：そうだなあ、一週間……いや、もう少し少しかかるかもしれないなあ」
桃子「（不審に）戻つて……：：：くるよね？ まだ借りを全部返してもらってないけど」
菊丸「だから高校の時の借りって何だよ。覚えてねえよ。お、俺だつていつまでもここに……：：：それ……：：：ここに……：：：桃子「ここは？」
菊丸「よ、よく考えたら、みんな……：：：順番に……：：：いなくなるだろ。そりやお前は慣れてるか……：：：桃子「（語気強く）慣れてる？」
菊丸「あ、いや、ちがう。今の失言。失言です、ごめんなさい……：：：」
桃子「（怒りを抑え）わかった。貸しがあるなら、ホントは嘘。だからご自由に。仕事がんばって」
菊丸「桃子、背を向けさっさと行ってしまおう。桃子「嘘？（何か言いたい）……：：：」

○ 東京の街・俯瞰

○ カメラマン派遣事務所

菊丸 「社長の君島の前で頭を下げています。菊丸。」
君島 「お願いします。仕事下さい！」
菊丸 「急に来られてもねえ。そんなすぐ無いよ。それに大丈夫なの？ また過呼吸とかで撮影とばされちゃ迷惑だし」
菊丸 「大丈夫です。きつと…：…たぶん」
君島 「じゃあ、期待しないで待ってて」
菊丸 「はい、お願いします！」

○ 菊丸のアパート・部屋（夜）

菊丸 「求人誌をチェックしている菊丸。」
菊丸 「さすがに四十過ぎはつらいねえ…：…」

○ 工事現場（数日後）

慣れない様子で交通整理をしている菊丸。

○ 聖病院・ホスピス病棟・福田の病室

ベッドで眠っている福田を心配そうに見ている沙織と桃子。
沙織 「パパ、眠ってる時間が長くなったね」
桃子 「（そつと沙織の肩を抱く）…：…」

○ ショッピングセンター（日替わり）

菊丸 「着ぐるみの菊丸がチラシを配っている。ちようだい、もらってちようだい、もらってちようだい」
と、背後から子供にバシバシ叩かれる。
菊丸、チラシを放り出し追いかけて。

○ 聖病院・ホスピス病棟・室井の病室

桃子が室井の診察を終えたところ。

桃子「最近落ち着いていますね、室井さん」

室井「おかげさまで楽です。(言いにくそうに)

あの、ここしばらくカメラマンの……菊丸

さんの姿が見えないようですが……？」

桃子「ええ。仕事で東京に戻ってます。あ、

そういえば、室井さんが彼の写真集をお持ち

ちだったんですよね。それで私が気付いて

買って……彼に写真、依頼しますか？」

室井「いえ、私はいいいんです。ただ、先生に

折り入ってお願いしたいことが……」

桃子「何でしょう？」

室井「実は、私が死んだら家内には内緒で処

分してほしいものがあるんです。自分では

どうしてもできなくて……」

と、ベッド脇の引き出しから古い手帳を

出し、隠すように挟んであった一枚の写

真を、桃子に見せる。

それは……若い室井が、一才ぐらいの男

桃子「これ、室井さんですよね。このお子さ

室井「……？」

室井「私の子供です。隠し子……と言った方

桃子「……」

室井「でもこの写真を撮った後から、ずっと

行方知れずだったんです。あの写真集を見

つけるまでは……」

桃子「その視線の先、本棚に菊丸の写真集。」

桃子「……！」

○ 菊丸のアパート・部屋（夜）

菊丸「まだ仕事みつかりませんか。何で

もいいんですよ。何でも撮影しますから……

：はい、首長くして待ってます（と切る）」

菊丸「その時、玄関の呼び鈴が鳴る。」

菊丸「（ハッと）まさか……」

菊丸、恐る恐るドアを開けると、訪問者

菊丸「は美智子。コンビニの袋を持っている。」
 美智子「美智子先生！」
 菊丸「ど、どうしたんですか、いきなり」
 美智子「こっちで研修があつたので様子を見
 に。あなたは一応、私の患者さんです」
 菊丸「：：それはどうも」
 美智子「元気そうでしたよ。袋を掲げ」
 菊丸「はあ：：うちで？」
 美智子「（にこりと）つまみもありますよ」
 美智子「隠しきれてない求人誌を横目に、
 美智子「お仕事の方はいかがですか？」
 菊丸「仕事：：は順調ですよ。もうスケジュ
 ールがきつくて、きつくて。今日は着ぐる
 みの撮影で大変でしたよ」
 美智子「じゃあ、しばらく戻らない？」
 菊丸「ですかねえ。（話題変えようと）先生は
 普段もよく飲むんですか？」
 美智子「いえ、ほとんど。飲むと説教くさい
 って言われます。菊丸さんはお酒飲むと、
 変わります？」
 菊丸「全然。俺は静かに飲む男ですから」
 テーブルに空き缶が散乱し、菊丸が酔っ
 た勢いでひとり話している。
 菊丸「：：ですからね、鬼塚のこと好きだっ
 たのは認めますよ。でもそれは高校生の時
 の話でね、最後に会ったのも、十年以上前
 で：：それから思い出しもしないし、もう
 存在すら忘れてたんですよ」
 美智子「（苦笑し）はい」
 菊丸「なのに突然現れて、命助けられて、拉
 致されて：：ダンナ見せられて、しかもい
 い人で：：いい人なのに、一人を見てると、
 なんか胸がもやもやして：：」
 美智子「：：」
 菊丸「俺はケチな男ですよ。なんでダンナさ

ん、病気なんですか。なんであんなところに
いるんですか！……俺、あいつの悲しむ顔、
もう見たくないですよ」

（フラッシュ） × ×

父の葬儀で涙を堪えている高校生の桃子。

美智子「だから逃げ出したんですか？」

美智子「鬼塚先生のそばにいるのがつらくな
ったんですよね？」

菊丸「……そうですよ。いけませんか？」

美智子「私、先生から聞いたんです。高校生
の時に借りがあるのは、本当は自分の方な
んだって」

菊丸「え……？」

美智子「お父さんが亡くなって、悲しくて悲
しくてどうしようもない時、菊丸さんが一
生懸命、笑わそうとしてくれたって……」

菊丸「……」

（フラッシュ） × ×

教室。机の中から菊丸の変顔写真を見つ
け、思わず笑ってしまふ桃子と、その様
子を隠れて見ている菊丸。

美智子「救われたって言ってましたよ。だか
ら友達の事故でショックを受けているあな
たを、放っておけなかったんです」

菊丸「……」

美智子「私、前にちよつと言いましたよね。
鬼塚先生が、あなたを病院に連れて来たの
は、……自分のためでもあるのかなって……」

菊丸「……」

美智子「もうあまり時間はないと思います」

菊丸「……」

○ 交差点（日替わり）

小泉の事故現場に花を手向けている菊丸。

菊丸「(ポツリと)小泉……お前が俺にあいつを会わせてくれたのか……？」

○ 聖病院・外観

○ 同・ホスピス病棟・ロビー・廊下

エレベーターから降りてくる菊丸。
と、何やらスタツフが慌ただしい。

菊丸、通りかかる美智子に、

菊丸「(嫌な予感で)美智子先生……？」

美智子「お帰りなさい。ついさつき……」

菊丸「！」

思わず福田の病室前へ走る菊丸。

と、中から沙織の泣き声が聞こえ足を止める。その場に立ち尽くしたままで――。

菊丸「……」

○ 海岸に夕陽が沈んでいく

○ 聖病院・礼拝堂(日替わり)

福田の遺体が安置されている。
献花に長い列ができ、病院スタツフ、パジャマ姿や点滴を付けた患者も多くいる。
その列に菊丸。遠目で桃子を見ている。
桃子と沙織、涙を堪え気丈に振る舞い、
献花を終えた一人一人に頭を下げている。

関根「(小声で)スタツフには家族葬と伝えたんですが、福田先生にお別れとお札を言いたい方が大勢いらして……すみません」

桃子「いえ、ありがたいことです」

関根「こんなに慕われている先生が……本当に残念です」

そこへ並んでいた菊丸が献花をする。
菊丸、桃子と沙織に一札するが、その二人の顔を見ることができない。

菊丸「(更に深く一札をして)……」

桃子「(も頭を下げて)……」

沙織「すると沙織がポツリと、

沙織「ママ……」
沙織の視線の先、喪服の若林由紀恵（45）
が幼い女の子（サ）を連れている。

桃子「……」
菊丸「……」

○ 同・中庭

式が終わった後。何やら話している沙織
と由紀恵。女の子は沙織と遊びたい様子
でまとわりついている。
帰りがけの菊丸、その三人を遠目に見て
：ふと桃子の姿を捜す。
礼拝堂の窓から心配そうに見ている桃子
が……

○ 病院前の海岸（日替わり・夜）

○ 聖病院・ホスピス病棟・ダイルーム（夜）

桃子が古いフォトブックを見ている。
それには、高校生の菊丸や同級生たちの
変顔写真が何枚も入っていて、

桃子「（フツと笑う）……」

菊丸「そこへ菊丸が通りかかり、
まさか……」

桃子「桃子、フォトブックを隠すようにして、
桃子「まさか？」今日は美智子先生にお願い

している。歩いてすぐのマンションに自宅が
あるの。もう病室には泊まれないしね」

菊丸「そっか。あのさ、余計なことだとは思
うんだけど、これからどうする……」

桃子「（ポツリと）私、人との縁が薄いのか
……」

菊丸「え？」

桃子「父は早くに亡くなったし、母親は再婚
して今は遠くにいる。兄弟もいないし、や

つと結婚できたと思つたら……」

菊丸「鬼塚……」

桃子「菊丸は長生きしてね」

菊丸「（明るく）ああ、俺は長生きするよ。死

に損ないは長生きするつて、昔から相場が

決まってるんだよ」

桃子「聞いたことない」

菊丸「それにさ、縁が薄いつて、あるだけい

いだろ。俺なんか父親が誰だか永遠にわか

んないんだぞ」

桃子「（ふと脳裏に）……」

× × ×

（インサート）

室井に見せられた、幼い子を抱いた写真。

その裏に『慎一・一才』と記してある。

室井「どうか彼には言わないで下さい」

桃子「……」

× × ×

桃子「そういえば、東京の仕事は？」

菊丸「あ……仕事ね。ちやちやつと片付けま

したよ。だから戻つて参りました」

桃子「そっか。戻つてきたんだ。美智子先生

に連絡もらつて来てくれたのかと思つた」

菊丸「借りを返しに、な」

と、菊丸がフォトブックの写真に気づき、

菊丸「（驚いて）それ、まだ持つてたのかよ？」

桃子「……まあね。あの時は毎日毎日、机の

中に入つて笑つちやつたわよ。特にこの

菊丸のしょももない顔……」

菊丸「（真顔で軽く腕を掴み）ちよつと、来い」

桃子「え？」

○ 同・廊下へ家族室（夜）

桃子「菊丸に連れられてる桃子。」

桃子「なに、どしたの？」

菊丸「と、ドアを自分で使つている部屋の前に来る

と、ドアを開け、桃子を一人押し込む。」

桃子「えっ、ドアを閉め押さえて寄りかかり、

菊丸、ドアを閉め押さえて寄りかかり、

菊丸「ずっと独りになつてなかつたんだろ。誰か呼びに来たら、ちゃんと伝えるから」

桃子「ドア越しの桃子。」

菊丸「俺、お前の父親が死んだ時は、一生懸命笑わそうとしたけど、今度は泣かせてやることにした。……我慢しないで、ちゃんと独りで泣けよ。そのほうがいい」

（フラッシュ）

父の葬儀で涙を必死に堪えている桃子。

（フラッシュ）
福田の葬儀で、涙を堪え気丈に振る舞う桃子。

菊丸「（おどけ）俺、ちよっとカッコいいだろ」
桃子の返事はない。

菊丸「……」
から、桃子の嗚咽する声が聞こえてくる。

○ 病院前の海岸（数週間後）

沙織「菊丸が写真を撮っていると、沙織が来る。菊丸「おう、沙織ちゃん。久しぶり。学校の帰り？」

沙織「うん。何、撮ってるんですか？」

菊丸「今日は波の形がキレイだなあと思って」

沙織「へえ、なんかプロっぽい」

菊丸「（苦笑）プロですよお。おじさんは」

沙織「（ふと）菊丸さんはずっとこっちにいるんですか？」

菊丸「そうだねえ、ずっと病院にお世話になつてるわけにもいかないし、仕事も少しづつ入ってるから、東京に戻って、月に何度かこつちに来られればいいかな」

沙織「じゃあ、お母さん、寂しくなるね」

菊丸「ならない、ならない。沙織ちゃんいるんだから」

沙織「私：：もうすぐ本当の母親のところに
 行くんです」
 菊丸「え：：？」
 沙織「パパが死んでから、ずっとずっと考え
 てて：：やっぱりその方がいいかなって」
 菊丸「鬼塚……お母さんは何て言ってるの？」
 沙織「おか：：桃子さんは一緒に暮らしたい
 って言ってくれます。でも、どうするかは
 私が決めていいって」
 菊丸「（ポツリと）あいつらしいな……」
 沙織「ホントは、ママのことは許せない。パ
 パを裏切ったから。けど、やっぱり血は繋
 がってるし、妹がいて：：この間はじめて
 会ったけど可愛いんです。お姉ちゃんって、
 人懐っこくて。相手の人も私の塾の先生だ
 ったから、知らないわけじゃないし」
 菊丸「それで：：いいの？」
 沙織「：：わからない。ママは、もしかした
 ら私の、パパの遺産が目当てなのかなって
 思ったりもするし：：」
 菊丸「ええー」
 沙織「でも、桃子さんは私が一緒だと出来な
 いこともあると思うし、迷惑かなって」
 菊丸「あいつはそんなこと思わないよ」
 沙織「ですよね。だから甘えちゃいけないな
 って思うんです」
 菊丸「沙織ちゃん、大人だなあ。お父さんも
 同じようなこと言っちゃったかな：：」
 余計なこと言っちゃったかな：：」
 （フラッシュ）
 菊丸「礼拝堂の中庭で、福田に言う菊丸。
 持てないんで、本人に任せちゃいます。無
 責任と言われようが、まあそこは信頼して
 るってことで勘弁してもらって」
 菊丸「でもね、沙織ちゃん、子供でいいんだ
 よ。相手は大人なんだから、まず自分の希
 望を言っているの。言われた方がどう思う」

かなんて、先に考えちゃダメだよ。だって
 ホントに相手がそう思うかなんて、わか
 らないんだから。勝手に妄想しちゃダメ
 菊丸「急いで答えを出さなくてもいいんじや
 ないかな。もう一度、本当はどうしたいの
 か自分に聞いてごらん」
 沙織「：：：そうですね。もう一度よく考えて
 みます」
 菊丸「ハハ、なんかごめんね。エラソーに」
 沙織「いいえ、ありがとうございます」
 菊丸「（少しホッと）……」

○ 聖病院・ホスピス病棟・室井の病室

桃子「桃子が室井と話している。
 桃子「あの、本当に何も伝えないままでい
 んでしようか。菊丸はずっと父親のことを
 知りたがつていたんです。でもお母さんは
 何も教えてくれなかったみたいです。：：：私
 何も教えることがありません。若い頃、私が北
 海道で大学で教えている時に、彼女がそこ
 の事務員で出会いました。妻がありながら
 の：：：それを承知で、彼女は子供を産んでく
 れたんです」

(インサート) × ×

四十二年前。産院。
 室井「生まれてすぐの菊丸を抱いている室井。
 室井の「妻との間には、なかなかなか子供が出
 来なかつた。だから本当に嬉しかった」
 菊丸の母・佳代の、その幸せそうな笑顔。

室井「なの：：：今思うと、何とも無責任で
 卑怯な話です。彼女が何も言わないのをい
 いことに、認知するとおきながら、
 延ばし延ばしにしていて：：：」

(インサート) × ×
 四十一年前。佳代の家。

つかまり立ちの菊丸の前に、ろうそくが一本の誕生日ケーキがある。室井が菊丸を抱っこし、佳代が写真を撮っている。

室井「ついに嫌気がさしたのでしよう。ある日、忽然と姿を消してしまった……」

(インサート)
お土産のおもちやを手にと、空っぽになった佳代の家を茫然と見ている室井。

桃子「菊丸は、東京で生まれ育ったと思っています」

室井「……そうですね。東京に行っただけでね。捜したが見つからなかった。でも考えれば、珍しい苗字ですから、もっと本気で捜せば見つけれられたはずですよ。でも私はしなかつた。捨てたのも同然ですよ」

桃子「残念ながら……お母さんは、去年、亡くなられたそうです」

室井「(少し動揺し)……」

桃子「本当にこのままで……？」

室井「私は乱れた人間です。もう今になって誰の心も乱したくない。彼の心も、妻の心も……妻は何も知りません。だからお願いです。私が死んだら写真の処分を……」

室井「引き出しの中から手帳を出し、大事そうに幼い菊丸との写真を見つめ、室井「すみません。こんなことを先生に。でも最期まで手元に置いておきたくて……」

桃子「……わかりました。お引き受けします」

室井「ありがとうございます」

室井「桃子に深々と頭を下げる。」

静枝「……」

そのドアの向こう、聞いている妻の静枝。

○ 桃子のマンション・外観(夜)

○ 同・室内(夜)

沙織の荷物整理を、桃子が手伝っている。
沙織「（明るく）うーん。パパの物、分けるの
難しいなあ。医学書はいらないし」

桃子「（笑って）じゃあそれは私がもらうわ。
こーやって整理すると……お父さんの荷物、
少ないね」

沙織「……うん。ほとんど寝に帰るだけだっ
たからね。パパ、超真面目人間だった。あ、
この写真、もらっていい？」

その写真——菊丸が礼拝堂で撮った、家
族三人の最後の写真。

桃子「もちろん」

と、沙織が不意に桃子の背に抱きついて、
沙織「私、お母さんのこと大好き」

桃子「……ありがと」

沙織「（ポツリと）本当の子供だったらよかつ
たのにな……」

沙織、桃子の背に顔をうずめる。

桃子「（胸がいっぱいで言葉にならず）……」

○ 聖病院・ホスピス病棟・ロビー（数日後）

菊丸と美智子。

菊丸「えッ、沙織ちゃんか？」

美智子「さっき挨拶に来てくれましたよ」

菊丸「なんで？俺には？じゃなくて、お
かしいよ。ついこの間、沙織ちゃん、もう
一度よく考えてみるって……」

美智子「今ならまだ間に合うかもしれないわ。
向こうのお母さんが迎えに来るって言って
たから」

菊丸「！」

○ 桃子のマンション・表

菊丸が走って来ると、ちょうどタクシー
が走り出し、桃子が見送ったところ。

菊丸「鬼塚！」

桃子「（振り返り）菊丸、どうしたの？」

菊丸「どうしたのじゃない。なんで沙織ちゃん
 桃「一緒に暮らしたんだよ。お前、このままずっ
 菊丸「はあ？」 お前ちゃんと自分の気持ち、
 桃「言ったのか？」
 菊丸「へー、一緒に暮らそうって」
 桃「遠慮してんじやねえよ！」
 菊丸「（凶星で）だっ娘を頼むって：：言っ
 桃「自信なくて：：！」
 菊丸「それは：：！」
 福田「彼女はこれからまだ別の人生を歩める。
 福田「沙織と一緒にいたら、選べないことも
 福田「沙織にとっても、どちらが幸せなのか
 福田「頼むとは、まだ言葉は重い：：私：：死
 桃「彼がそんなこと：：」
 菊丸「俺も余計なこと：：」
 桃「沙織ちゃんも、勝手に相手の気持ち考え
 菊丸「この似たもの親子が！」
 桃「俺は身をもって知ってる。明日生きて
 菊丸「保証なんてどこにもない：：」

(フラッシュ)
菊丸の目の前で起きた、小泉の事故。

菊丸「お前だってよくわかってるはずだろ。
× × ×
だったら後悔しないように、もう一度だけ
本音でぶつかってみるよ」

桃子「……」
菊丸「ほら、さっさと車出せ、高級車。タク
シ、追いかけるぞ」
桃子「！」

○ 走る桃子の車

○ ××駅・構内

菊丸と桃子が急ぎ来て、沙織を捜す。
——と、妹の手を引く沙織の姿が見える。

菊丸「沙織ちゃん！」

沙織「(気づき) 菊丸さん！……お母さんも」
桃子「沙織ちゃん……」

桃子、沙織の隣の由紀恵に頭を下げる。

由紀恵「(も軽く頭を下げ) 忘れ物かしら？」
沙織「ちよつと行ってくる。ホームで待って
て。(妹に) ごめん。手、放すね」

× × ×
桃子と沙織。少し離れて菊丸がいる。
菊丸、桃子が言い出せないのを見て、

菊丸「水くさいよ、沙織ちゃん。挨拶なしで」

沙織「ごめんなさい、菊丸さん。私……」

桃子「沙織ちゃん！ 私も……沙織ちゃんが
大好き。可愛くて可愛くて、たまらない」

沙織「！……」

桃子「だから……これからも沙織ちゃんのお
母さんでいたい。本当のお母さんになりた
い。一緒にいたい。本当のこと思い出して、話
して、笑って……あなたの幸せを見届けた
い。ダメ……かな？」

菊丸「(胸が熱く)……」

沙織「(少し考え)……ありがとう。お母さん。
今の言葉、すつごく嬉しい。そういう風に

言ってくるの、心のどっかで待ってた」

桃子「（期待し）うん……」

菊丸「（涙ぐむ）よかった……」

沙織「じゃあ、私行くね。二人とも、来てくれて本当にありがとう。またね」

桃子「！」

菊丸「え？」

沙織、手を振り、笑顔で行ってしまう。

桃子と菊丸、呆然と――。

菊丸「ハハ……ドライブだねえ。今の子は……」

桃子「（ショックだが）……でも、いいよ。気

持ちはきちんとなと伝えられたから」

菊丸「……だね。あ、ラーメンでも食ってく？

俺、おごるから」

桃子「……うん」

○ ラーメン屋・店内

菊丸 お金を入れ食券を買おうとしている菊丸。

菊丸 「えーと、普通のやつでいいよな」

すると桃子がためらいなく、一番高い、

具の『全部乗せ』のボタンを押す。

菊丸 「！……」

× × ×

菊丸と桃子、カウンターに並んで食べている。菊丸のは普通のラーメン。

桃子、黙々と食べている。食べていない

と泣き出しそうなのだ。時折、目に涙が

浮かんでは、汗を拭くフリをして――。

菊丸「（そんな桃子を見て）替え玉もいいぞ」

○ 聖病院・ホスピス病棟・ロビー

菊丸と桃子が帰って来る。美智子がいて、

美智子「あ、お帰り。お客さんがお待ちよ」

桃子「？」

沙織「もう、遅いよ。どこ行ってたの？」

桃子「菊丸と桃子、振り向くと、沙織がいる。

桃子「沙織ちゃん！」

菊丸「なんで？」

沙織「私、またねって言ったでしょ。一緒に帰りたいけど、先ずママと妹にちゃんと納得してもらわないと面倒だと思ってる。時間かかるかなって思ったけど、意外とすんなり。妹には泣かれちゃったけど……」
菊丸「やっぱり大人だなあ……沙織ちゃん」
沙織「大好きなパパのこと、一緒に話せるの、お母さんしかいないから。向こうの家じゃ無理だもんね」

桃子「（胸がいっぱいで）沙織ちゃん……」

沙織から桃子に抱きついて。

菊丸と美智子、笑顔で見守っている。

そこへ、室井の妻・静枝が来て、

静枝「あの……菊丸さんでしょうか？」

菊丸「ええ、そうですけど」

静枝「私、室井と申しますが……」

菊丸「ああ、室井さんの奥さんですか」

静枝「ちよつとお願ひしたいことが……」

菊丸「いいですよ。じゃ、あちらへ（と促す）」
桃子「（気にかかり）……」

○ 同・ダイローム

菊丸と静枝が話している。

静枝「実は、人を捜していたんだけど、いいんです」

菊丸「人捜し……ですか。一応カメラマンな

んですけど……まあ、いいでしょう！」

静枝「主人の子供を……」

菊丸「え？」

静枝「他の女性との間に生まれた子供です。

私には子供は出来なかったの、主人には

その子しか……」

菊丸「……：：：：：：：：：：：それは奥さんにはつ

らいお話ですね……：：：：：：：：：：：いいんですか？」

静枝「（頷き）手がかりは、この写真だけなん

ですが……」

静枝、菊丸に古い写真を見せる。

それは室井が持っていた、若い室井と幼

菊丸「室井さん、若いです（ね）……：：：！」

——と、一瞬にして菊丸の表情が変わる。
菊丸「（写真をじっと見て）……」

○ 同・室井の病室

ベッドで眠っている室井。
ベッド脇の引き出しが少し開いている。

○ 同・デイルーム

写真を見つめたままの菊丸と、静枝。

静枝「最後に父親として会わせてあげたいんです。捜していただけですか？」

菊丸「（フツと）さあ、どうですかね。捜せるかどうか、ちよつと……」

静枝「よろしくお願いします」
静枝、菊丸に頭を下げて。

菊丸「……」

桃子「その二人の会話を陰で桃子が聞いていた。……」

○ 病院前の海岸

菊丸がひとり海を見ている。

桃子が隣に来て、座る。

菊丸「！ びっくりした。気配消すなよ」

桃子「さっきのラーメン、美味しかった」

菊丸「食い過ぎだよ、あれは。ま、でもよかったな。沙織ちゃん、帰ってきて」

桃子「うん。菊丸のおかげだよ」

菊丸「だろー？ 俺、いい仕事したよな。じやあ、これで借りは全部返したってことで。

俺、そろそろ東京に戻るワ」

桃子「室井さん……お父さんに会わない気？」

菊丸「……お前、知ってたの？」

桃子「つい最近、室井さんから聞いた。黙つ

ていてほしいって頼まれて……でも奥さん

は知らないって言ってたから、さっきは驚

いた」

菊丸「盗み聞きか。ま、いいけど。あの奥さ

ん、俺のこと、確信犯だったな」

桃子「奥さんも勇気がいったでしようね……」

菊丸「でもやっぱ不倫だったか。やるねー、うちの母親も。俺に言えないわけだ」

桃子「室井さんは、認知するつもりだったみたいだけど、ある日、忽然といなくなったって……そう言った」

菊丸「ふーん、そうなんだ」

桃子「そりゃ、お母さんは女手一つで苦勞さ

れたと思う。でも何か事情が……」

菊丸「うるさいよ！」

桃子「……」

菊丸「……わるい。ひとりにしてくれ」

桃子「（立って行きかけるが）……すずらん」

菊丸「？」

桃子「すずらん……だから」

菊丸「……」

○ 聖病院・ホスピス病棟・家族室（夜）

菊丸「財布から母・佳代の写真を出して見ている。……」

菊丸「何なんだよ、今さら……」

○ 同・ホスピス病棟・廊下（日替わり）

歩いてくる菊丸。ふと『すずらん』の病室前で足を止める。……

が、通り過ぎて――

桃子「その様子を後ろから来て見ていた桃子。……」

桃子「……」

静枝「菊丸、一礼して通り過ぎようとするが、……」

静枝「あの……まだお時間かかりますか？」

菊丸「待つていた……母は、亡く……」

静枝「……」

静枝「……」

静枝「……」

静枝「……」

静枝「……」

静枝「……」

静枝「……」

静枝「……」

静枝「……」

静枝「……」

静枝「お母さんは、あなたを守ろうとしたんだと思います。きつと……」
菊丸「どういうことですか？　なぜ、あなたがそんなこと……？」
静枝「それは……私があなを殺そうとしたから」
菊丸「！」
桃子「（聞いていて）！」
静枝「夫に他の女性がいることは、薄々わかっています。鈍感なフリをするのも大変で……でもまさか、子供までいるとは……」

○ 回想・佳代の家・玄関先（四十一年前）

静枝の声「それを知った時、ショックで、もう自分を止められなくて……」
静枝が何回も乱暴に呼び鈴を押している。出てきた佳代、静枝を見て顔色が変わる。
と、佳代の後ろから現れた幼い菊丸を、静枝が奪うように抱き上げ、バッグから包丁を出して、その胸に突きつける。
佳代「！」
静枝「ここから出て行って。主人の前から消えて。じゃないと、この子を殺す！　二度と主人と会わないと約束して。破ったら、どんな手を使っても、この子を殺してやる！　私は本気よ」
佳代「（恐怖に震え頷く）……」

○ 元のホスピス病棟・廊下

静枝「ただの醜い嫉妬……バチが当たったのね。その後、私に子供は出来なかった……」
菊丸「……」
静枝「でも、勘違いしないで。私は、夫もあなたの母親も許したつもりはないんです」
菊丸「……」
静枝「ただ、偶然なのか必然なのか、あなたが目の前に現れた。けど、あの人が名乗る気はないと知った時……」

菊丸「ホントはさ、そんないい母親を、俺が
楽に、幸せにしてやらなきゃいけないかった
んだよ。なのに、大学行かせてもらっても、
ろくに勉強せず、まともに就職もしないで、
自由気ままにカメラマンやって……結局、
四十過ぎて結婚もしないで、孫の顔も見せ
てやれなかった……」

桃子「……」

菊丸「ただの親不孝者だよ。そんな自分の不
甲斐なさをさ、自覚したくなくて、見ず知
らずの父親を憎むことで、ごまかしてたん
だよ。ハハ……俺ってやっぱサイテー」

桃子「菊丸……」

菊丸「俺に会う資格はないよ。できるなら……
母親に会わせてやりたかった……」
その菊丸の背が小刻みに揺れている。

桃子「ひとり扉を出て、

桃子「この間のお返し。しばらく人が入らな
いよう、外にいるから（と、閉める）」

菊丸「（とめどなく涙があふれて）……」

○ 同・ホスピス病棟・室井の部屋

室井「ベッドの室井と、傍らに静枝。

室井「一人残して……わるいな。でもおかげ
でいい人生だった……ありがとう。もう思
い残すことはないよ……」

静枝「あなた……もう少し、もう少しだけ、

室井「（そつと目を閉じる）……」

○ 早朝の海岸（翌日）

まだ太陽が昇りきる前の海岸を、菊丸が
何かを吹っ切るように走っている。
が、足がもつれ、転んで砂まみれに。

菊丸「くそお。これかぁ、父親が運動会でや
つちまうのは」

と、海岸沿いの道を自転車の沙織が来て、
沙織「菊丸さん」

菊丸「沙織ちゃん！ どうしたの、こんな早
くに」
沙織「お母さんから連絡があつて捜してたの。
室井さんっていう人が、急変したつて……」
菊丸「！……」

○ 聖病院・ホスピス病棟・室井の病室（朝）

室井が意識のない状態でベッドにいる。
傍らに、桃子と看護師。そして静枝。
そこへノックと共にドアが開く。沙織。
桃子「ありがとう、沙織ちゃん」
入るのを躊躇している菊丸を、沙織がそ
つと押し、その扉を閉める。
菊丸「（下を向いたままで）……」
静枝、菊丸をベッド脇まで連れ、その手
を取り、室井の手を握らせる。

菊丸「……」
桃子「意識はもう……。でも最期まで聴覚は
残ると言われているから、言葉は届くと思
うわ」

菊丸「……」
だが、言葉が見つからない。

——と、ベッドに室井の名が記してある。
そして枕元には菊丸の写真集。

『室井慎太郎』と、『菊丸慎一』。
同じ『慎』の字が使われている。

菊丸「（ハッと）……名前……俺の名前は、あ
なたが付けてくれたんですか……？」
室井の表情は変わらない。
ただ、菊丸の握っている室井の指が、僅か
に動いた。

○ 同・ダイローム・テラス（夕）

夕陽が沈むのを見ている菊丸。
そこへ桃子が写真を持って来る。
室井と幼い菊丸が写っている写真だ。
桃子「これ、室井さんの奥さんが、菊丸に渡

してほしいって」

菊丸「(受け取り) ……ありがとう」

桃子「考えたらさ、室井さんにとっては、奇跡の連続だったよね。菊丸の写真集、本屋さんで偶然見つけたって言った…」

(インサート) × ×

本屋の写真集コーナーで、『菊丸慎一』の名を見つけ、写真集を手に取る室井。

室井「! ……」

桃子「その本人が、このホスピスに来て…」

(インサート) × ×

菊丸と話している室井。

室井「カメラマン？」

菊丸「その棚にあるんですよ、私の写真集」

そこへ白衣の美智子が来て、

美智子「菊丸さん、菊丸慎一さん」

室井「!」

× ×

桃子「もうめっちゃくちゃ嬉しかったと思う」

菊丸「(その脳裏に) ……」

(フラッシュ) × ×

室井が菊丸に言った言葉。

室井「神様は死を受け入れた者に、最後の褒美を下さるのかもしれない…」

菊丸「…」 × ×

笑顔と同時にそつと涙が浮かぶ。

○ 鎌倉の海

タイトル『一年後』

○ 聖病院・礼拝堂・外観

鐘が鳴っている。

シンプルなウェディングドレスの新婦と
 新郎が簡素な結婚式を挙げている。
 新婦は――美智子。
 列席者は――桃子、沙織、医長の関根と、新
 郎の家族（父親は車椅子）。
 全員が暖かな笑顔で二人を祝福し、菊丸
 が式の写真を撮っている。
 ×
 式が終わり、新郎が関根や桃子たちに、
 ×
 「皆さん、今日は本当ありがとうございます
 ×
 できました。父の前で結婚式を挙げる
 ×
 ことができました。」
 新
 郎、美智子に微笑むと、車椅子の父と
 関根「家族を連れて、一足先に結婚式だ
 美智子「いえ、ありがとうございます。」
 菊丸「でも驚きましたよ。電撃婚」
 桃子「お父さんの方が先に美智子先生を
 入ったのよ。うちの息子はどうかって」
 美智子「まさかこの歳で嫁に行くとは、自
 分でもビックリです。菊丸さんも来ていた
 菊丸「いえ、写真もありがとうございま
 した。」
 関根「そう。例のやつ、昨日できたんだよ」
 関根「礼拝堂の入り口に置いてある冊子
 を持つて来る。」
 表紙には『ホスピスマイル』の文字。
 沙織「それなに？」
 桃子「ホスピスを理解してもらいた
 ために作ったパンフレット。ご本人やご遺族に許可を
 いただいた患者さんの写真も載っているの。
 あ、お父さんの写真もあるわよ」
 菊丸「ペーじをめくっていると、福田、
 桃子、沙織の家族写真がある。」
 他にも、赤木や堂本。
 若い夫婦の守屋と由香は、存命中に生ま
 れた赤ちゃんとのスリ―ショット。

菊丸「そのどれもが笑顔の写真だ。」
桃子「また調子に乗って」
関根「でも最近忙しいよね。月に一回も来てくれないじゃない」
菊丸「いやあ、何ですかねえ。ロコミってこわいなあ。あ、明日はグラビアアイドルの撮影なんですよ。プールで水着……」
桃子「(咳払い)そういう話は、沙織ちゃんのないところでした」
菊丸「……すみません」
沙織「あ、菊丸さん、美智子さんと一緒に撮って下さい。ホントに綺麗。憧れるなあ」
美智子「沙織ちゃんは、あと十年後くらい？」
桃子「えーやだ、考えたら寂しくなる」
菊丸「お前いくつになるんだ？ えーと……」
桃子「数えなくていい！」
沙織「私……ヴァージンロード、菊丸さんと歩いてもいいよ」
菊丸「え？」
桃子「……」
菊丸「(大真面目に)俺、沙織ちゃんと結婚するの？」
桃子「はあ？」
菊丸「……？」
みんなが笑って――。

【おわり】

※〈参考文献〉

岩本宣明 (編) 吾味宏基 (写真)

「ホスピス さよならのスマイル」(弦書房)